
光

r.i.e

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光

【コード】

N3906Z

【作者名】

r.i.e

【あらすじ】

現代の資本主義社会を生きる、純粹で野蛮なジャンルの人間の話

第1話

私は薄グレーの、もやもやとした空気の中にいる。

四方八方から、薄汚い誘惑、罵倒、墮落した愚痴さが聞こえてくる。

そう、ここは、「THE 大人の世界」

それも、欲どおしく、資本主義社会の

サバイバルを駆け上がり、ピラミッドの上層部に腰をおろす、嫌われ者たちの溜まり場だ。

PM11:00。

彼らのくだらない自慢話が始まる。

どんなモデルとやった、CD何枚売れた、M&Aが成功した、ブログのランキングが何位だ、新車の乗り心地、有名ブランドのオープニングパーティーの時間、海外の別荘の話、靴にどれだけお金をかけたか、エアラインのステータスの話・・・

Oが五桁のアルコールを飲みながら、「友人」という名のライバルたちと、今夜も同席する。

私は、妻の父が経営する、一部上場企業の役員である。半年前に子会社も作り、業績もいい。

素朴なサラリーマンの家庭で育ち、とりわけずば抜けた才能がある

わけではないが、甘いマスクと、爽やかな性格で、兼ねてから女性に苦労したことはなく、妻からも、見初められる形で結婚した。

妻と出会ったのは、14年前、お互い学生で、ちょうど流行りはじめていたサークルで知り合った。

当時、高校時代から付き合っていた彼女がいたが、彼女の両親が経営するコンビニの売れ行きがあまりよくなり、彼女自身も、お店に出ることが多々あるようになって、私自身も、華やかな令嬢とのデートに浮き足立ち、次第に彼女のことを疎ましく思いはじめていた。

25歳、少し早いかとは思ったが、義理の父のすすめもあり、妻と入籍した。

将来のポストが約束されていた。

元カノとは、入籍するまで、二股という形で関係は続いていたが、ある時、彼女が妊娠したというので、慌てて墮胎させた。

将来のポストを手放したくなかった。

入籍したと告げた次の日から、彼女の携帯は着信拒否になっていた。

結婚生活がはじまり、妻の浪費癖が発覚した。

渡したお金はすぐにブランド品に消えていく。

料理もしたことがないので、毎日あり得ないほど不味いメシを食わされた。

後悔していた。

アイツだったら、こんなに浪費しないだろうに。

料理もしっかり作って、あたたかい家庭が築けただろうに。

子供も、今はいらないと云う。

化粧臭い妻の派手派手しい部屋を見る度、彼女のことを恋しくて仕方なかった。

妻を抱く気にもなれなかった。

私はある日、妻に、金は渡さないと怒鳴り、実行した。

妻は怒って、何か言ってきたが、パジャマのまま、マンションの外に力ずくで引っ張り出した。

寒い冬の夜だった。

妻が、「寒いからあけて！」

と悲痛な声で、何度も叫んでいる。

私は無視をした。

何度もドアをガチャガチャする音が聞こえた。

私がドア越しで「すいませんと言え！」

そう怒鳴ると、不貞腐れたような声で「すいません」と聞こえた。

「なんだ！その言い方は！もっかい言ってみろ！」

「・・・」

「あ？聞こえねえぞ！」

「すいません」

私は鍵を開け妻を入れた。

「寒いから早く閉めろ！」

とも付け加えた。

この日から、妻の様子が変わっていった。

朝起きてこなくなることが多くなり、昼間もずっとベッドで横たわっていた。

ある日、妻が、風邪を引いたので、医者に行きたいから、金がほしいとベッドから言ってきた。

私は、その竄れた妻の姿に無性に腹が立ち、

「カネカネうつせえんだよ！」

そう怒鳴りながら、寝ている妻の顔に財布を投げ付けた。

妻との結婚は、出世のツールとしての一つにしかなくなってからは、

いかに義理の両親はじめ、周囲に悟られずに、妻を虐待するかが趣味のようになっていた。

幸い、妻の両親は、経営者にもかかわらず、人が良く、とりわけ、表のマスクが甘い私には、疑うことをせず、いつも自分たちの娘を卑下し、私はそれに居心地の良さを感じていた。

妻の性格も、派手好きではあるが、さっぱりしており、育った環境からか、人の裏をかくことをあまりしない。

医者では「うつ病」と診断されたそうだが、妻にも周囲にも、妻自身の怠けからくるものと、自分を正当化し保身した。

私の饒舌さに、誰も疑いはしなかった。

ふと、隣のテーブルに目をやると、かつてETブームだった時に一儲けした、メディアでもよく見かける新興系の社長だ。

白のデニムに、黒のトレーナー。

ラブな格好だ。今はジーンズとはいわない。デニムだ。

ふと、学生時代が甦った。

アイツは今どうしてるんだ……。

周りの喧騒が遠くなり、彼女に墮胎させた時のことが思い出された。

手術が終わってから、泣いていた彼女に

「いつまでもメソメソすんな！」

そう怒鳴ると、睨み付けるような目で私を見た。

あの時彼女は恐怖心や罪悪感と戦っていたのだろうか？

私にすぎりたかったのだろうか……。

3年前の胆石の手術の痕を手でさすった。

身体の傷みなら、そのうち消えるが、心の痛みは、相手にも、自分にも、植え付けられ、ふとした時に、胃が締め付けられるように甦る。

まるで、雨の日のような色だ。

そう、どんなに晴天の太陽の下でも、きらびやかなライトが当たる場所でも、私の心はいつもグレーだ。

ある日、妻が失踪した。

仕事から自宅に戻ると、クローゼットの中の妻の物が全てなくなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3906z/>

光

2011年12月13日11時06分発行